

社会美学のコンセプト (1)*

— 理論的考察の展開 —

宮 原 浩 二 郎**

はじめに

本稿の目的は社会美学 Social Aesthetics の特徴と意義を明らかにし、その理論的考察の展開を記述することにある。

そのために本稿は二つの作業を行う。一つは21世紀初めの人文社会科学における「社会美学 social aesthetics」概念を精査することである。環境美学における「人間関係の美学」(A. バリアント) や映像人類学における「社会生活の美学」(D. マクドゥガル) をはじめ、多様な概念化の共通項に注目しながら、現時点における「社会美学」の特徴を明らかにする。もう一つは、視野を20世紀の人文社会科学全体に広げ、広い意味での社会美学的認識の流れを俯瞰することである。石川三四郎、G. ジンメル、W. モリスの美学的社会思想から G. ベーメの「雰囲気美学」、W. ヴェルシュの「感性学」、A. ストラティラの「組織美学」まで、「社会美学」の今後の展開にとって不可欠な知的素材を提供する。

「社会美学」は人文社会科学の新たな研究分野であるとともに、従来のアカデミックな研究活動から溢れ出る可能性をもつ。「社会を美学する」姿勢は、学術的な社会認識や調査の新たな方法であるとともに、ともに社会を形成していく私たちの基本的な生活姿勢でもあり得る。本稿はその可能性に向けた最初の学術的礎石である。

1 社会美学 social aesthetics への関心

近年の人文社会科学において、「社会美学」に言及する論考が新たに登場している。日本では現

在のところ筆者の試みにとどまるが、海外の英語文献に目を転じれば、このテーマに関わる学術論文がここ10年の間に次々と公開されている。

これらの英文論考の著者は多様な専門領域に属している。美学、哲学、文化人類学、社会学、政治学、経営学、カルチュラル・スタディーズなど、人文社会科学のさまざまな領域において「社会美学」が論じられている。また、論者の活動地域も多様であり、アメリカ、イギリス、オーストラリアと並んで、イタリア、スウェーデン、メキシコの研究者も目立つ。しかも、これらの論考の間には相互交渉の形跡がほとんど見られない。「社会美学」への関心は、筆者自身を含め、世界各地のさまざまな専門分野に従事する研究者たちの間で自然発生的に広がりつつある。

現在、人文社会科学の英文論考でタイトルに「社会美学 social aesthetics」を含むものは、筆者の入手したもので11編ある。これらの論考は専門領域も主張内容も多様だが、この概念の扱い方によって、さしあたり二つのグループに分けることができる。第一は、ある社会のもつ感性的・美的な質 aesthetic quality を指示するものである。社会はわれわれの視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚、運動感覚などを通じて知覚可能な質感をもっている。「社会美学」はこうした社会の可感的側面を指し示す。第二は、社会を感性的・美的に認識するための学術的姿勢を意味している。社会は概念的・論理的な分析だけでなく、感性的・美的な感受によってもまた認識可能である。「社会美学」はこうした社会認識の感性的・美的方法を意味している。

以下では、さしあたり上記の分類に沿いつつ、多様な論考を整理することから始めよう。

*キーワード：社会美学、社会の感性的・美的質、人と人との間の雰囲気

**関西学院大学社会学部教授

2 社会のもつ感性的・美的質

1) 「社会美学とドゥーン校」

社会のもつ感性的・美的質としての「社会美学 social aesthetics」に着目した論考として、まずはオーストラリアの映像人類学者・民族誌映像作家 D. マクドゥガルによる「社会美学とドゥーン校」がある (McDougall 1999 ; 2006)。

マクドゥガルは北インドにある全寮制中学校 (ドゥーン校) で長期にわたるフィールド調査を行った。当初の目的はこの学校を多文化接触と社会化の場として研究することにあった。ところが、初めて現地を訪れたマクドゥガルはその「演劇舞台のような印象に打たれた」という。「ここではつねにパフォーマンスが行われている。ベルが鳴ると、みながステージに急ぐ。揃いのコスチュームだ。一、二時間するとまたベルが鳴る。彼らは別のコスチュームでまた急ぐ。この時から私は、学校のような小さなコミュニティはちょうど演劇や創作作品のように見る事が可能ではないかと考え始めた」 (McDougall 2006 : 105)。マクドゥガルはすぐに「服装、時間割、食事、生徒の声の調子、仕草や姿勢など、より細々した物事」に注意を向け始める (McDougall 2006 : 96)。こうして彼の研究関心は多文化接触や社会化の問題から、この学校社会のもつ感性的・美的な質感の問題へと移行していく。

マクドゥガルはこの特質を「学校の美学」「社会の美学的特色」「共同生活の美学」「社会生活の美学」などと呼んでいる。そして、これらを集約した一般概念が「社会美学 social aesthetics」である。マクドゥガルは「社会美学などと言うとドン・キホーテ扱いされる」危険を自覚しながらも、それが従来十分に注目されてこなかった独自の社会的事実であることを強調している (McDougall 2006 : 116)。

私たちは五感を通じて身のまわりの環境の質を測り、事物の色彩やテクスチャー、人々の動きや行動のパターン、さらには生活のテンポを知覚している。同様に、ドゥーン校に滞在したマクドゥガルはその建物やグラウンドのデザイン、生徒の服装の色や形、関係者の会話や身振り、寄宿舎の

規則や時間割、食事やスポーツのさまざまな儀礼を自分自身の感覚を通して知覚しようと試みる。その過程で、こうした生活上のディテールからなる「社会美学」は、構成員の政治的・社会的信念やイデオロギーにも、暗黙の記号や象徴的意味のシステムにも、さらにはこの小社会を取り囲む社会構造にも還元することのできない独自の事実性をもっていることに気づかされる。

マクドゥガルによれば、従来の人文社会科学はこのような「社会美学」の独自性や重要性を見過ぎてきた。社会のもつ美学的特徴が研究対象として取り上げられても、あくまでも大きな社会構造やイデオロギーの象徴的表現として付録的に扱われてきたのである。「社会の美学的特色は簡単に他のカテゴリーに吸収され、ついには見えなくなり無視されてしまう。あるいは、美学的特色はそれ自体で影響力をもつのではなく、より大きな力 (歴史やイデオロギーなど) の単なる象徴的表現とみなされている。たしかに美学は他の社会的力と無縁ではないが、さりとてその単なる残りかすでもない。……人間的経験における美学的次元は重要な社会的事実であり、経済的生存、政治的権力、宗教的信念などと並んで正面から受け止められる必要がある」 (McDougall 2006 : 98)。

社会生活における事物の感性的ディテールは、文化人類学、文化史、芸術史、カルチュラル・スタディーズなどの分野でこれまでも取り上げられてはいる。問題はそれが主に「文化的テキストの注釈や解釈学的人類学」にとどまっていることである (McDougall 2006 : 106)。独自の社会的事実としての「社会美学」をすくい上げるためには人文社会科学的分析能力だけでは不十分だったのであり、新たな「共同生活の美学に対する感受性」が要請されている (McDougall 2006 : 96)。「美学の社会的役割を適切に記述するためには、この主題のもつ多次元性に迫る「言語」が必要になる。それは視覚的、聴覚的、言語的、時間的、さらには (共感的な連想を通じて) 触覚的な領域において作動する言語である」 (McDougall 2006 : 116)。言葉だけでなく、音声、写真、映像、博物館展示などを通して「社会美学」を捉えること。マクドゥガルはこうした方法を視覚人類学の進むべき方向と考えている。

ふり返ってみれば、カルチュラル・スタディーズをはじめ近年の社会文化研究は身のまわりの社会生活のディテールを「読み解く」ことを指向してきた。その背景には、マルクス主義、フェミニズム、ポストコロニアル批評などの「批評理論」の影響がある。ドゥーガル校の場合でいえば、建物やグラウンドのデザイン、生徒の服装や色合い、会話や身ぶりのスタイル、食事やスポーツの儀礼などに注目しても、これらはいずれ階級、ジェンダー、エスニシティなどの理論カテゴリーに還元され、その象徴的表現として「読み解かれ」ることになる。マクドゥガルは、研究者が社会（＝テクスト）を「読み解く」ための特権的な鍵（＝理論）を所有しているという安易な思いこみに異議を唱えている。社会認識は「読み解く」より以前に、まずは「感受する」ことから始められる必要がある。その時初めて、社会のもつ感性的・美的質である「社会美学」が正当に把握されるのである。

なお、マクドゥガルは「美学 aesthetics」という言葉にあらためて注釈を加えている。ここでの「美学」は「美 beauty」や「芸術 art」ではなく、ギリシア語の語源である「アイステーシス aisthesis」（感性的経験）に関わるものである。同様の注釈は以下で取り上げる論考にもしばしば登場する。後述するように、これは現代美学の「感性学」化に呼応している。

2) 「ジョン・デューイの社会美学」

次に、アメリカの政治学者 J. コスノスキーの「ジョン・デューイの社会美学」を検討しよう (Kosnoski 2005)。この論考は21世紀に生きる私たちがいかにしてデモクラティックな生活態度を復興させていくかという問題を、J. デューイの「社会美学」概念を中心に考察している。

デューイの『経験としての芸術』はデモクラシーの感性的・美的基礎の弱体化という観点から当時のアメリカ社会に対して批判的考察を行っていた (Dewey 2005 [1934])。急速な産業化・都市化やマス・メディアの浸透によって社会生活は断片化され、人々は自分の行為と公共世界との意味あるつながりを見失っていく。「その場かぎりのスリルへの渴望」「変化に対する狂熱的愛好」

「落ち着きのなさ」「神経的不満」が常態化し、人々は「各人の生活に影響を及ぼす社会的諸力を見分ける能力を失っていく」(Kosnoski 2005: 197)。デューイはその背景に「空間的断片化と時間的狂熱の増大」があることを指摘し、これを「社会の美学 aesthetics of society」の変容として把握した。コスノスキーはこの「社会の美学」を「社会の空間的・時間的あるいは美学的な質 society's spacio-temporal or aesthetic qualities」として明確化しようと試みる。

デューイの場合、同時代の社会を批判する足場として、19世紀アメリカ開拓時代のアソシエーションの存在があった。西部のフロンティア・タウンにおいては「人々の活動はすべて地理的・社会的に限定された地域でなされたため、自分たちの行為が環境全体のうちに引き起こす結果を観察し修正することが容易であった。……人々はそれぞれ複数の役割を担っていたため、自分の行為が無数の社会的・技術的営みに与える効果を直接に観察することができた」(Kosnoski 2005: 207)。木材も釘もハンマーも家具も、すべてが近所の作業場で作られ、ここが住民の集会所ともなった。原材料の生産から製品の使用まですべて可視的であり、それが「個人間の相互関係の知覚を促進した。彼らは一つの行為が他の行為に及ぼす効果を「感じる」ことができ、それゆえに、彼らの注意は物事自体ではなく物事間の関係に向けられた」(Kosnoski 2005: 207)。激動する社会環境のただなかで人々は有意義な関係性を維持することができた。この「開拓時代の美学的環境」が、リベラルで柔軟なジェファソニアン・デモクラシーの担い手たちを輩出させたのである。

デューイによれば、19世紀のフロンティア・タウンの人々は激変する社会環境にもかかわらず自分たちの社会をそれなりに落ち着きのあるものと感じていた。これに対して、20世紀前半の同時代人にとっての社会は、はるかに「断片化され」「混乱し」「狂熱的な」質感をもっている。コスノスキーはこうした「社会のもつ空間的・時間的あるいは美学的質」を指して「断片的、混乱的、狂熱的な社会美学 fragmented, chaotic, frenetic social aesthetics」と呼ぶ。コスノスキーによれば、この種の「社会美学」は21世紀の現代におい

てデューイの時代よりもさらに増幅されている。「個々人はとくに非政治的になろうとしなくても、ただ現代社会を体験するだけで、自分の行動のもつ公共的意味を見極める力を失っていく」のである (Kosnoski 2005 : 200)。

デューイ=コスノスキーの社会認識は特異である。それは社会制度や政治イデオロギーではなく、人々によって体験される社会の感性的・美的質の問題に着目している。保守か革新か、市場社会か福祉国家か、リバータリアンかコミュニタリアンか、ナショナリズムかマルティカルチュラリズムか、など政治イデオロギーや社会制度をめぐるさまざまな議論がある。しかし、それ以前に、特定の社会は特定の「フィール feel」(手ざわり、肌ざわり、あるいは感触)をもち、私たちは日々それを感覚し、体験しているという事実に着目する必要がある。人々は五感を通して「社会のもつ空間・時間的あるいは美学的な質」を経験している。コスノスキーがデューイから読みとった「社会美学」とは、こうした社会のもつ可感的な質を指し示している。

デューイはアメリカン・デモクラシーの弱体化を社会制度や政治イデオロギー以前の、まさに「社会美学」の問題として把握していた。そのため、デモクラシー再興のための方策もまた「社会美学」に関わるものとなる。それは20世紀の「断片的、混乱的、狂熱的な社会美学」に対抗しようとする社会的時空間の創造である。デューイは「静穏な安定性 tranquil stability」と「恒常的な関係性 constant relationship」が保証されるような小さな対面的アソシエーションに期待を寄せた。その際、近年の市民社会論と異なり、デューイは対面的アソシエーションを「特定の政策や徳性の孵化器とみなすべきではない」と考えていた (Kosnoski 2005 : 211)。対面的アソシエーションが重要なのは、それが特定の制度提案や政治イデオロギーを生み出すからではなく、外部の一般社会では体験不可能な落ち着いた「社会のフィール」を提供することができるからである。それは「断片的、混乱的、狂熱的な社会美学」から人々を保護する聖域として、その存在自体が大きな意味をもつ。「この聖域において人々はたっぷりと時間を与えられ、意志決定の圧力にさらされるこ

となく、ある論題から別の論題へリズミカルに行き来することができる」(Kosnoski 2005 : 213)。対面的アソシエーションは一種の「美学的聖域 aesthetic sanctuary」であり、それを取り囲む一般社会の「社会美学」に対抗しようとするオルタナティブな「社会美学」をもつ。これこそがデモクラシー復興にとって不可欠だと考えるのである。

コスノスキーは「人は定期的に複雑性から撤退しなければならない」という結論にいたる (Kosnoski 2005 : 215)。それは個々人が小さな対面的アソシエーションのなかで、まとまりのある落ち着いた「社会美学」に身をゆだねることのできる時空間を確保するためである。そして、こうした「社会美学」的な環境整備こそが現代のデモクラシーにとって不可欠なのだという。このような議論はもっぱら制度論やイデオロギー論に傾いてきた従来の社会認識の盲点を衝いている。それはデューイの「社会美学」概念の再発見が可能にした美学的かつ批判的な社会認識の一例である。

コスノスキーはデューイを通して「社会美学」という新たな学問を提唱しているのではない。ここでの「社会美学」はもっぱら社会のもつ感性的・美的質という認識対象を指示している。とはいえ、この認識対象はそれ自体が論理的・科学的分析とは異なる感性的・美的感受を要請する。後述するように、社会のもつ質感への注目とは学術としての「社会美学」の提案と表裏一体なのである。

3) 「社会美学としての政治心理学」

もう一つ、メキシコの政治学者 P.F. クリストリーブの「社会美学としての政治心理学」を取り上げよう (Christlieb 2001)。クリストリーブは政治心理学を「社会美学」として展開させることを目指すが、この試みは必ずしも成功していない。社会を一つの全体性である「形式」として認識するという試みも説得的に展開されているとは言いがたい。しかし、この論考は「社会のフィール」を感じとる姿勢において優れたところがある。

クリストリーブにとって、「社会美学」は「人々の動き、急ぎ、休止、遅れ、距離、道なり、転置、集中、場所、使用、濫用、不使用、量、色、規模、強度、容量、騒音、沈黙、音声、肌合

い、柔らかさ、硬さ、断絶など、社会生活の形式を構成するあらゆる活動や状況や事物」に関わる (Christlieb 2001: 360)。これはきわめて感覚的な表現ではあるが、たとえばメキシコ・シティや東京・大阪のような大都市の雑踏を思い浮かべてみよう。そこでは無数の人々が仕事に、気晴らしに、一日中忙しく動き回っている。交通や通信はますます早く効率的になっていくが、「これらの「改善」は私たちが目的地に到達したり、一つの活動を完遂することを許さない。むしろ、前より早く空間を移動し、前より多くの活動をさせているだけである」 (Christlieb 2001: 361)。

ところが、停電になると、都市社会は一変する。「照明が消え、ファックスやコンピュータ、テレビや音響装置が止まり、人々の活動速度が緩まる。そして、人々はしばしば内省に沈み、窓の外を眺め、話し相手を求め合い、仕事に関係のない、よりパーソナルな事柄について語り合う。電気のない都市で、人々は実務的でなくなり、感受性を高めていく。……雑然とした都市のあちこちで多様な遊び空間が出現する。住まいや散歩、スポーツやトランプ遊びのための場が個人的に創られていく」 (Christlieb 2001: 363-364)。

現代社会では「孤立した人々が無意味な活動に忙殺されて」いる。「経済や健康や民主的統治については大きな前進があったといえるが、社会美学についてはますます危険な状況が生まれつつある」 (Christlieb 2001: 361)。そこでクリストリーブは自然発生的な遊びに注目する。たしかに、遊びへの動きは私たちの日常生活のいたるところに見て取ることができる。遊びは他に目的を必要としない、それ自体に価値のある社会形式である。そうであるならば、現代社会にとって不可欠なことは「社会そのものに十分な時間と空間を与えて、そこで遊びが自発的に現われるようにすること」なのだ、とクリストリーブは主張する (Christlieb 2001: 364)。

停電が誘発するような「遊び」への着目は、後述する W. ヴェルシュの「美学的な空き地づくり」への提案と響き合う。また、「遊び」「戯れ」「遊戯」(play, Spiel) が人間社会のもつ優れた感

性的・美的質を示していることは、F. シラー以来の哲学的美学において強調されてきた (von Shiller 1847 [1795]=2003)。クリストリーブは遊びのなかに肯定的な社会の質を感受しているのである¹⁾。

3 社会認識の方法

1) 「美しく共に暮らす—社会美学のためのアイデア」

「社会美学 Social Aesthetics」を一つの新たな学問として提案しているのはアメリカの美学者 A. バリーアントである。バリーアントは現象学的環境美学の先導者の一人である。近年の論考「美しく共に暮らす—社会美学のためのアイデア」を検討しよう (Berleant 1999; 2005a; 2005b)。

マクドゥガル同様、バリーアントもまた「社会美学」が「奇妙な響き」をもつことを自覚している。伝統的美学は絵画、彫刻、建築、音楽、演劇、舞踊などの独立した芸術作品を論じてきた。そこでは、対象から距離をとり、観照的、受動的、「無関心的」に知覚する態度が要求された。このような「事物 objects の美学」の枠組みからすれば、私たち自身がその参与者である「社会」を美学的知覚の対象とするのはたしかに奇妙ではある。

しかし他方で、20世紀以降の現代アートにおいては、M. デュシャンの「レディメイド」をはじめ、「芸術作品」以外の事物も頻繁に登場するようになった。それと並行して、美学的知覚の対象も「芸術作品」以外のさまざまな事物に広がっている。バリーアントはこうした状況を踏まえて、もはや事物とは呼べない「状況 situations」をも美学の対象に含めようとする。その場合、「どんな経験の場もそこには人々が関わっているのだから、われわれは結局さまざまな人間関係の状況に行きつく」ことになる (Berleant 2005b: 149)。こうして「社会的状況の美学」を想定することが可能になる (Berleant 2005b: 154)。これがバリーアントのいう「社会美学」である。

バリーアントは社会美学の対象となる「人間関

1) なお、社会のもつ感性的・美的質感としての「社会美学」は学校経営の文脈でも論じられている (Samier 1997)。

係の状況」をいくつか例示している。まず、エチケットのような日常儀礼であっても、人々がそのスキルを愉しんでいる状況のうちに一定の「優美さ」を知覚することができる。また、宗教的儀式をはじめ祝賀会やフェスティバルなどは本格的な舞台上演へ発展することがあり、その状況に対して美学的知覚を働かすことができる。さらに、「小さな子どもとの関係性」は、新鮮さ、繊細さ、表現の移ろいやすさ、色彩の喜びなどを通して美学的知覚を誘発する。同様に、「親子、友人、恋人の間の愛情などの社会的場面や、喧嘩や憎しみなど高度に質的な社会的場面では、知覚的経験が支配的である」(Berleant 2005b:150)。こうした親密な関係性を含む社会的状況はそれ自体で感性的・美的認識の対象となりうる。

バリエーションはさらに進んで、「愛の関係性をめぐる美の哲学 a philosophy of beauty about the relationships of love」に言及している。たしかに、私たちはパートナーや友人や子どもとの「愛の関係性」を知覚して、これを「美しい」と評することができる。その時私たちは当事者個々人の容貌や性格、言葉や行為を対象としているのではない。そうした個々の要素からなる社会的状況の全体、すなわち、「人と人との関係性」それ自体の美しさを認識しているのである。バリエーションによれば、強い知覚的覚醒をとまなう社会的状況はすべて社会美学の対象となりうる。そこには「芸術家がいらない代わりに、創造のプロセスそのものが参与者たちの間に働いている。……芸術的事物が存在しない代わりに、状況そのものが知覚的注意の焦点となる。参与者たちは状況の美学的性格の創造に貢献すると同時に、その特有の質を喜びをもって味わうことがありえる……。こうして、一定の社会的状況は人間関係を体現したまま美学的になることができる」(Berleant 2005b:154)。

バリエーションはこうした社会状況を「美学的社会秩序 aesthetic social order」と言い換えている。強い知覚的覚醒のもと、人々は抽象的規則や原理ではなく、「経験の直接性 immediacy of experience」を通して一人一人の内在的価値を認める(Berleant 2005b:158)。そこでは、通常は必要とされる理性による強制なしに、人々相互の協調性や親密性が現実化されている。かつてF.

シラーは欲望の強制からも理性の強制からも自由な、趣味を基軸とする社会秩序を構想したが、バリエーションの「社会美学」はそうした社会秩序を「芸術活動や愛……家族、そして世界中の小集団やコミュニティのうちに」見いだそうとする(Berleant 2005b:159)。

バリエーションの「社会美学」はなお着想の域を出ていない。「人間関係」や「社会的状況」という不可視の対象をどのようにして認識するのか、また、当事者と観察者の関係をどう考えるのかなど、さまざまな問題がある。伝統的美学からの脱却を唱えながら、「芸術作品の美」がなお暗黙の参照枠として残されている点も問題である。しかしながら、バリエーションの論考は「人と人との関係性」である「社会的状況」を感性的・美的に認識する姿勢を正面から提示している点において、また、それが私たちの倫理的感覚と響き合うような、感性的・美的に「よい」社会を志向することを示した点で先駆的である。

2) 「ホームワーク：ルーティン、社会美学、日常生活の曖昧さ」

次に、B.ハイモアの「ホームワーク：ルーティン、社会美学、日常生活の曖昧さ」を取り上げよう(Highmore 2004)。ハイモアはイギリスのメディア研究者であり、感情や情緒を重視したカルチュラル・スタディーズを指向している。この論考は「日常仕事に関する社会—美学的探究 socio-aesthetic inquiry の問題と可能性」を論じるものである。

ハイモアは炊事、洗濯、掃除といった日常仕事の経験を十分に把握できるような学問的方法を追求する。一方で、日常仕事の経験は伝統的美学の視界に入らない。それは「けだるく」「不定形で」「漂流する」経験であり、強い知覚的覚醒をとまなう芸術的経験の対極にあるからである。他方、社会学は日常生活の社会的意味や機能を対象としてきたが、社会科学の理論枠組や抽象概念への依存のため、人々の経験の記述が平板化されるという限界がある。そこで、日常仕事の経験を丁寧にすくいあげることでできる社会記述が考案されなければならない。「私は洗濯し、掃除し、食事をつくる。それと同時に、夢想し、回想し、心配す

る。こうした「心の状態」と「行動の状態」の連結は、その矛盾の同時性を取り込むことのできる日常生活の記録形式の必要性を示唆している」(Highmore 2004: 311)。これがハイモアのいう「社会美学」である。

ハイモアは、そうした「社会美学」の模範として、L. ジェールによる炊事の研究に注目している(de Certeau, Giard & Mayol 1998 [1994])。「ジェールの場合、炊事は個々の行動から感覚的領域へと漂流しあふれ出ていく。……母から炊事を習うよう懇願されて抵抗した少女時代をふり返り、ジェールは自身もまた「女の知識を授けられ、それが精神の監視をすりぬけて私のなかに忍び込んだ」ことを認めている。それは匂いや仕草を通して伝達されるノウハウであり、身体的技術が書かれたレシピよりもはるかに大切になる。この非認知的な感覚への参照を考えれば、炊事と食事がブルースト的な「非自発的追想」の肥沃な地盤となっても不思議はない。回想と追憶は炊事や食事の実際の場面と同時に存在している。香りや匂いが親密に体験された過去の肌ざわりを呼び起こす。いわば、喜びと不幸、愛と不安は炊事の運ぶ秘密の積み荷である」(Highmore 2004: 318)。

ジェールは炊事の匂いや仕ぐさや味の細部にこだわりながら、母や祖母の「仕ぐさの詩」を「言葉の詩」へ、そして、「レシピと味の書き物」を「言葉の書き物」へできるだけ忠実に翻訳しようとする。その文章は学界の権威に向けられたものではなく、母や祖母をはじめとする無名の女たちに向けられている。そのなかでジェールは「家父長制の不平等を非難したい気持ちと、女性の日常仕事の見えざるスキルや達成を賞賛したい気持ちとの間をすり抜けていく」(Highmore 2004: 317)。

こうした記述は社会生活のポリティクスを示唆するが、それを理論化し特定の解決策を弁証することを指向しない。母や祖母の世代の、家事と育児に縛りつけられていた無名の女たちの日々の炊事、その生きた真実の記憶を保持することが目指

されている。ハイモアによれば、ジェールは炊事という日常経験を十分に記述することに成功した。そこにはまた、無名の人々の経験を正当に言語化し記録するという「記憶の倫理 ethics of remembering」が実践されている(Highmore 2004: 320)。既成の社会学的記述では困難なことが、ジェールの「社会美学」的記述によって可能となったのである。

ハイモアは人々の社会生活の日常を「その体験的現実性のあらゆる複雑さにおいて把握する」ことを目指すが、そのためには理論カテゴリーに依存し、体系化を指向する既成の社会学は美学(あるいは感性学)によって補完されなければならない(Highmore 2004: 325)。こうしてハイモアは新たな「社会美学」の必要性を提起するのであるが、それはあくまでもカルチュラル・スタディーズの一翼を担うものと考えられている²⁾。

ハイモアの「社会美学」は日常生活の社会科学の記述が感性的・美的な知覚をとり込んでいくことを要請している。たしかに日常生活のありのままを、味や匂いや雑音の入り交じる生活気分のうちに描き出すことは重要なことである。ただ、ハイモアの提案はカルチュラル・スタディーズの枠内にとどまることに留意したい。人々の生活経験の豊かさや曖昧さがどれほど丁寧に記述されても、それが最終的にはジェンダー、階級、ポストコロニアリズムなどの理論カテゴリーによって「読み解かれ」てしまうのであれば、感性的・美的な社会探究のもつ可能性が限定されてしまうだろう。マクドゥガルやバーリアントが示唆するように、「社会美学」の要点は、社会「読み解く」ことではなく「感じる」ことにある。しかも、個々人ではなく「社会」のもつ感性的・美的質を認識することが求められているのである。

3) 「近代／芸術とマーケティング／美学—ゲオルク・ジンメル」の社会美学について

「社会美学」に言及する論文では G. ジンメルや W. モリスが引用されることが少なくない。ジン

2) ハイモアは「社会美学」的探究の例として、さらに P. ウィリスの「グラウンデッド美学」と A. ルフェーブルの「リズムアナリシス」をあげている (Willis 2001; Lefebvre 2004 [1992])。前者は社会学と文学の融合、後者は社会学と身体生理学の融合を目指すものである。なお、民間伝承をトランスナショナル・アイデンティティをめぐる批判的言説として受けとる姿勢が「社会美学」と呼ばれる場合もある (Saldivar 2007)。

メルやモリスの仕事については次節で概観するが、ここでは二人の姿勢を改めて「社会美学 Social Aesthetics」として明示した論考を簡潔に紹介する。

ジンメルについては、P. G. モントーと A. ストラティの「近代／芸術とマーケティング／美学—ゲオルク・ジンメルの社会美学について」(Monthoux & Strati 2002) がある。モントーは「アート／ビジネス」をテーマとするスウェーデンの経営学者、ストラティは後述する「組織美学」を代表するイタリアの研究者である。この論考によれば、ジンメルは「さまざまな社会的構成物を芸術作品とみなし」て、「消費やマーケティングなどの社会現象に対して美学的アプローチをとった学者」であり、「社会科学の美学的課題にとってもっとも優れたパイオニア」と位置づけられる (Monthoux & Strati 2002 : 2)。

ジンメルにとって、美学的なものは社会の装飾や化粧にとどまるものではない。美学は現実社会を構成する力をもつ。とくに「社会」それ自体のもつ美や崇高、いかえれば「社会的美 social beauty」や「社会的崇高 socially sublime)」は社会制度の構築や運用に大きな力を発揮してきた (Monthoux & Strati 2002 : 3)。たとえば、ローマ法体系の力の源泉の一つはそのピラミッドを思わせる「崇高さ」にある。同様に、ジンメルはナポレオン法典や合理的なフランス庭園（また、その対をなすコモン・ローや英国式庭園）に、また、カンパネラやモアのユートピアや社会主義思想のうちに、美と崇高の力を感じとっている。

やや唐突ではあるが、モントーとストラティはこうした「社会美学」的認識が今日の企業経営にとって不可欠なのだと主張する。なぜなら、「ビジネスがアートであるならば、リーダーシップもまた美学的である」からであり、「ヨーゼフ・ボイスの芸術＝資本のスローガンが予告するように、アートはやがてゆっくりと経済へと拡がって

いく」からである (Monthoux & Strati 2002 : 8, 10)³⁾。

4) 「ボサンケットと社会美学」

モリスについては、イギリスの哲学研究者 A. ヴィンセントの「ボサンケットと社会美学」(Vincent 2006) がある。この論考は20世紀英国の代表的ヘーゲル学者・B. ボサンケットの思想を扱う。ボサンケットがヘーゲル哲学と W. モリスの思想実践を結びつけ、「社会美学」と呼ぶべき立場に到達したことを論じている。

モリスは「日常生活の芸術化」を提唱したが、その思想実践のなかで19世紀末イギリスの社会主義運動に参列している。ヴィンセントによれば、ボサンケットはモリスの芸術運動の社会性に共感し、それに「哲学的光沢」を施した。「芸術は個人の変革だけでなく、人々がそこで働き暮している環境の変革をも可能にする。芸術の場には身体と精神のバランスや心理的な調和があり、この調和が主体の道徳的、経済的、社会的世界に波及していく」(Vincent 2006 : 59)。芸術は個々人の日々の経験を高め、「人生をより生きるに値するもの」にし、「人生の価値を高める」ことを通じて社会変革に貢献する (Vincent 2006 : 61)。「もし芸術が万人の活動の一部となれば、コミュニティ全体の社会的再生が可能になるだろう」。ヴィンセントはこうした思想を「ボサンケットの社会美学」と呼んでいる (Vincent 2006 : 65)。

4 社会美学の特徴—さしあたりの総括

以上、近年の人文社会科学における「社会美学」概念を包括的に検討してきた。ここで一度立ち止まり、これまでの作業から明らかになってきた「社会美学」の特徴を暫定的に整理しておきたい⁴⁾。

「社会美学 social aesthetics」はまずは私たち

3) ジンメルの「社会美学」は他にも論じられている (Federici 2005など)。なお、本稿では扱わないが、J. ボイスの「社会彫刻」や「芸術／資本」の概念、また、「すべての人は芸術家である」という言明は社会美学にとっても示唆的である (Stachelhaus 1987)。

4) その他に、T. ヴェブレレンや C. W. ミルズの「社会美学」を考察する論考や、アクション、パフォーマンス、ハブニングに始まる現代アートの社会的アクティヴィズムを「社会美学」と呼ぶ論考がある (Tilman 2004 ; Larsen 1999 ; Bo ilovic 2006)。

の認識の対象そのものである。それは「社会のもつ感性的・美的質」のことを指示している。しかし同時に、そうした質を把握するためには感性的・美的な認識方法が要請される。この認識方法もまた「社会美学」と呼ばれている。本稿の目的は後者の社会認識の方法ないし姿勢としての可能性を追求することにある。しかし、そのためには前者の「社会のもつ感性的・美的質」に関する考察が不可欠である。その意味で両者は表裏一体である。一言でいえば、「社会美学」は「社会美学」的なものを研究対象とする認識方法であり、そのようなものとして一つの新しい学術活動を志向するのである。以下では、こうした学術活動としての「社会美学」を括弧をはずして、社会美学、と呼ぶことにしたい。

これまでの考察から、社会美学の特徴として、さしあたり以下の三点を指摘することができる。

第一に、社会美学は社会のもつ感性的・美的質を把握しようとする。制度論やイデオロギー論ではなく、「社会のフィール」に着目するのである。ジンメル的にいえば、社会の「内容」よりも「形式」を重視する。そのため、社会美学は「内容」を重視する従来の人文社会科学を補完することもあれば、逆に対立することもありうる。

第二に、社会美学が対象とする「社会」は研究者個人による知覚が容易な小社会が中心となりやすい。すでに「親密な関係性」「炊事の間」「対面的アソシエーション」「学校生活」「企業経営」などが例示されてきた。しかし、より直感的な認識であれば、「大都市」や「アメリカ社会」などの大社会を扱うことも不可能ではない。社会美学は身のまわりの小社会に軸足をおきながら、その射程を全体社会にまで伸ばしていくのである。

第三に、社会美学はたんなる事実認識にとどまらない規範的、倫理的、ユートピア的指向をもつ。すでに「美学的社会秩序」「美学的聖域」「遊び空間」「社会の再生」「記憶の倫理」などが例示されてきた。社会美学は感性的・美的に「よい」社会を指向する。それを通じて、あらためて深い意味で、規範的・倫理的にも「よい」社会を指向するのである。

5 社会美学的認識の再発見

近年の人文社会科学文献を検討した結果、社会美学の三つの特徴を析出することができた。以下では、社会美学における「社会のフィール」「対象となる社会の範囲」「規範性、倫理性、ユートピア性」に定位しつつ、20世紀の人文社会科学全体に視野を拡げ、そのなかに広い意味で社会美学的な認識姿勢を再発見していく。この作業は社会美学の深化と豊饒化に向けた理論的考察への道筋を示す試みである。

1) 石川三四郎の「社会美学」

意外なことに、社会美学を初めて正面から提唱したのは、20世紀前半の日本においてアナキスト思想家として知られた石川三四郎である。「社会美学としての無政府主義」の冒頭で、石川は次のように述べている。「社会美学とは、・・美学の社会的または社会学的研究をする学問をいうのではない。私が今ここにいう社会美学とは、社会現象そのものを美的観照の対象として研究することである」(石川 1946 [1932]:1)。

石川は「社会のフィール」を明確に意識化した先駆者の一人である。たとえば、石川の構想する自由平等の理想社会は鮮やかな感性的・美的なイメージによって彩られている。石川によれば、民衆の自発的コミュニンが自由に連合し拡張していくとき、「そのコミュニンの形体と色彩とは、今日の強権社会に於ける画一制度の下にては到底想像もできないほどの種々相を現はすだろう」(石川 1978a:202-3)。それは「縦と横とに綾羅をなせる複式網状組織」である。それはまた「常に流動して発展する多くのメロデーの複合」としての「社会交響楽」である(石川 1978a:203, 209)。石川は「社会」の色や形、音響のなかに一種の美を感受し、これを「社会美」と呼んでいる。石川の無政府主義思想は何らかのイデオロギーや制度構想への信念ではなく、彼の生きた社会の「フィール」に対する豊かで鋭敏な感受性から産み出された面が大きい。

石川は人々の労働や生活が組織化され、相互に結び合っていく様子を、一種の芸術に見立ててい

る。「各自が自由にして自発的行動が許され」「全体に一貫せる一味の連帯性……一貫せるリズムを以て発展し」「各員が特殊の旋律を奏すべき職分を持つ」とき、そこに社会における「多趣の一味」が実現する（石川 1978a：200）。この意味での「多趣の一味」は「社会美」の基本条件の一つとされる。それを追究する社会美学の射程は職場の小集団から大組織、地域社会から民族社会、さらには世界社会にまで拡張されていく。

石川は自らの社会美学を「社会美とその美的評価との事実を記述し、説明する科学であると同時に、人間の美的欲求に満足与へるために、美的評価の内的法則に合致する方式を示すところの規範である」としている（石川 1978a：219）。その規範性、倫理性、ユートピア性については多言を要しない。とくに注目すべきなのは、その倫理性がリベラルでユーモラスな寛容の精神に彩られている点である。鶴見俊輔がE. カーペンターの影響にふれながら的確に指摘するように、石川は「社会生活における人びとがおたがいの親しさを重要な課題とし……言葉のもっともひろい意味におけるエロティックなものを、文化の全領域にとりもどす」ことを考えていた（鶴見 1976：470, 474）。この「社会的エロティシズム」ともいうべき傾向は「優者はその優を示し、劣者はその劣を示して、協同するのである」、さらには「愚者をしてその愚を充分に発揮せしめよ」といった、リベラルにしてユーモラスな「競進互示の精神」によく現われている（石川 1978c：444）。それはまた、「裸体的社会生活」の理想や徹底的な平和主義とともに、石川の「美的民主主義」の本質を形作っている（石川 1978b：78）。

現在からみれば、石川三四郎の社会美学には芸術と美を同一視する近代美学の限界があった。また、マルクス主義に対する感情的批判をはじめ概念構成上の厳密さに欠けるきらいがある。とはいえ、それが自由で伸びやかな未来の洞察に溢れ、欠陥を補って余りある卓越した試みであることは疑えない。石川三四郎の存在は海外はもちろん日本でもほぼ忘れられているが、今後の社会美学の展開にとって貴重な思想の宝庫であり続けるだろう。

2) G. ジンメルと W. モリス

すでに述べたように、社会美学においてジンメルの存在は大きい。それには確かな理由がある。

ジンメルは個人と個人の相互行為のうちに「社会」を認めた。ジンメルによれば、「人びとが互いにまなざしを交わしあい、相互に妬みあい、たがいに手紙を書き交わしたり、あるいは昼食を共にし、……ある者が他者に道を尋ねたり、たがいに着飾って装いをこらしたりすること」、ここにすでに「社会」が生まれている（居安 2004：207）。この「社会」はそれ自体で私たちの五感に訴える、すぐれて可感的なものである。また、よく知られた「社会圏の交錯」や「異邦人」などの社会学的考察は感覚的・触覚的連想に富み、イデオロギー論や制度論とは別の次元で「社会のフィール」をとらえている。

ジンメルの卓越性は対面的な相互行為状況に対する感性的・美的認識において発揮される。たとえば、社交の場は人々が対等性、相互性、協調性を愉しむ相互的パフォーマンスの場として把握される。社交とは人と人の間の距離の伸縮をとまなう繊細な社会的虚構である。それは虚偽でも粉飾でもなく、それ自体で貴重な価値ある人類文化の華である。私たちは社交に現実の生々しい欲望や感情や利害関心が持ち込まれるのを嫌う。それが「社交という社会学的な芸術形式を社会学的な自然主義へと退化させる」からである（Simmel 1917=2004b：68）。同様に、コケットリは「愛の遊戯形式」である（Simmel 1909=2004a：143）。ジンメルの社会美学的探究の対象は社交やコケットリといった相互行為状況を出発点としながら、法律、庭園、社会思想などへと広がっていく⁵⁾。

ジンメルの仕事には規範性や倫理性は目立たない。が、近代ヨーロッパの大都会が生み出した「社交」や「社会圏の交錯」のうちに一定の感性的・美的価値を認め、ある種のユートピアの可能性を感じていることは明白である。少なくともそこには、「人と人の間の距離を尊重する」という都市的感性が浸透している（Simmel 1957 [1896-1918]=2004c）。

モリスの影響も大きい。よく知られたアーツ・

5) ジンメルの「社交」や「コケットリ」の分析と同様に、九鬼周造の『「いき」の構造』もまた、人と人との関係性に関する社会美学的考察として捉え直すことができる（九鬼 1979 [1930]、宮原 2005d）。

アンド・クラフツ運動は産業資本主義によって劣化した19世紀末イギリスの社会風景への対抗運動であった。エンゲルスはモリスを「根深くもセンチメンタルな社会主義者」と評したが、これはモリスが制度論やイデオロギー論以前に、当時の醜く荒廃した「社会のフィール」への反発からその社会認識を出発させたことを裏書きしている（五島 1971：20）。

モリスは工芸家、作家、経営者、社会運動家という多面性をもつ。工芸家としてのモリスは壁紙、彫刻、ステンドグラス、金属細工、染色、家具木工、造本などを通じて、「日用の必要品を芸術品に転ずること」を目指した（五島 1971：18）。そのなかでモリスは、芸術を「ふつう認識されているものより広く解釈し、絵画とか彫刻、建築だけでなく、あらゆる家庭用品の色とか形、いや、もっと広く、耕地や田畑や牧場の配置、町や公道の管理といったものも含めて」考えるよう主張した（Coleman 1988=1998：267）。また、中世ゴシック建築を高く評価するだけでなく、それを可能にした大工・鍛冶屋・レンガ職人などの協同労働の有り様を理想的社会組織の一例として考察している。モリスの社会美学的探究は「芸術の拡張」を提唱したが、その対象は日常工芸品などのモノに始まり、それに関わる労働の組織や生活環境、さらには全体社会のあり方までを射程に含むものである。

『ユートピアだより』に見られるように、モリスの社会美学は顕著な規範性を帯びている。モリスのユートピア主義は今日のエコロジーや街並み保全運動、消費者運動や文化経済学の源流として再考されつつある。社会美学の展開にとっても大きな今日的意義をもっている。

3) 組織美学

組織論の領域では20世紀末から「組織美学 organization aesthetics」と呼ばれる新たな研究アプローチが現われている。従来の組織構造分析や組織文化論の認知主義的偏向を批判し、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚などによる感覚データを導入することを通じて、人間の組織生活の現実に即したきめ細かな研究を試みている（竹中 2007）。

組織美学は組織の目的合理性（ロゴス）や価値

（エートス）ではなく感性的・美的なもの（パトス）に焦点を合わせる。これは制度やイデオロギーではなく社会のもつ感性的・美的質を把握しようとする社会美学の基本姿勢と一致している。たとえば、P. ガリアルディは組織のパトスを把握するためにさまざまなアーティファクト（人工物）に注意を向けることの重要性を指摘する。会社の玄関、オフィスの机の配置、社員の服装、役員室の壁や絨毯など、すべてがその組織特有のパトスを表出している（Gagliardi 1996）。また、A. ストラッティは取締役会における意志決定を例に、その場の「人々の匂い、身振り、声、眼差し、感覚」や「ペンキの匂い、椅子のきしみ、ページがめくられる音、プロジェクターの人工的な白熱光」などに注目し、ここに「美」「醜」「キツチュ」などの美的カテゴリーを導入しようとする（Strati 2000：20）。いずれも、組織のもつ「社会のフィール」に敏感であろうとする姿勢が示されている。

組織美学は組織論の一翼を担う活動であり、企業経営や組織運営に対する実利的貢献を求められている。そのため組織美学の対象は営利企業をはじめとする実用的な目的結社が中心である。これに対して、社会美学の対象はあくまでもそれ自体で価値のある、外的な目標に縛られない「社会」そのものである。そのため、組織美学を「組織レベルの社会美学」と同一視することはできない。ただし、営利企業をはじめさまざまな目的結社も単なる手段ではない、コンサマトリーな「人と人の交わり」の側面をもっている。この側面に焦点を合わせた組織美学は組織レベルの社会美学として展開されていく可能性がある。

組織美学は経営コンサルタント的な傾向をもち、規範的、倫理的、ユートピアの性格は希薄である。とはいえ、美的組織化 aesthetic organizing に関する理論的・実証的研究やジャズの即興演奏を「奏者間のたえざる社会的交渉」による「現在進行形のコラボレーション・アート」として捉える試みなど、規範的含意をもつ研究も現れていることに注目したい（Monthoux 2000；Barrett 2000）。

なお、組織美学においても、「美学」が「芸術」や「美」に限定されない、広い意味での感性的経

験の全体に関わることが強調されている。組織美学の展開もまた美学の「感性学」化の動きに呼応しているのである。

4)「雰囲気美学」と感性学

「美学 aesthetics」の語源は「感性」を意味するギリシア語のアイステーシス aithesis である。近年の哲学的美学はアイステーシスに立ち戻ることによって美学を「芸術による植民地化」から解放し、感性の働き全般を扱う学問として再興させようと試みている⁶⁾。なかでも、その代表的な論者の一人 G. ベーメによる「雰囲気美学」の試みは社会美学の展開にとっても示唆に富んでいる (Böhme 1995=2006 ; 2001=2005)。

ベーメによれば、私たちの知覚は個々のモノの認識より以前に、その場の「雰囲気」への気づきから始まる。雰囲気は「私が関与しながらも私とは区別された何か」であり、「主観的なものでありながら、他の人々と分かち合うことができ、それに関して他の人々と理解しあうことができるようなもの」である (Bohme 1995=2006 : 171)。その意味で雰囲気は「準客観的」な性格をもつ。それは「鬱蒼とした森」のような自然、「落ち着いたカフェ」のような人工空間、さらには「緊迫した会議」「朗らかな誕生パーティ」のような社会空間において日常的に知覚されている。ベーメは舞台演出、インテリア、塗装、美容、デザイン、映像、広告、BGM などの専門家が得意とする「雰囲気づくり」に注目するとともに、「人と人の間のコミュニケーションにおける雰囲気」に分け入り、その発生・変化・消滅の機微を丁寧に考察しようと試みる (Bohme 1995=2006 : 206-221)。とくに後者の「人と人の間の雰囲気」は、本稿が重視してきた「社会のもつ感性的・美的質」あるいは「社会のフィール」をより具体的に把握している。「人と人の関係性」それ自体の可感性が立証困難だとしても、それは「雰囲気を味わう」という日常表現が示すように、「人と人の間の雰囲気」として確実に可感的だからである。

「雰囲気美学」を社会美学として捉え直すとき、その対象は会議・会合や協働作業などの対面的相互行為の場をはじめ、「雰囲気を味わう」ことが容易な小社会が中心となる。具体的な知覚対象としては、その場に参与する人々の態度、姿勢、言葉づかい、音調、視線、身なりなどがある⁷⁾。その上で、その場のさまざまなアーティファクト (テーブル、椅子、プラントなど) や空間構成、音響や色調や照明などを知覚し、この「社会」のもつ雰囲気を研究することになる。ここからさらに、対象を都市にまで拡大し、街路の音や匂い、空間の広狭感や昇降感などを尊重した新たな「都市美学」を試みることもできる。そこで私たちは「記号論的なものの束縛」から解放され、既成の知識にもとづくイメージとは異なる「都市の雰囲気」を味わうことが可能になる (Böhme 1995=2006 : 164-179)。

「雰囲気美学」は「美学を一般知覚理論として展開する」ためのプロセスとして展開されているため、その規範性や倫理性は顕著ではない。(Böhme 1995=2006 : 3)。しかし、人と人の間の雰囲気への感受性はおのずから規範的な含意を帯びている。たとえば、コミュニケーションの効率性を重視する現代的傾向に対して、ベーメは「コミュニケーションそのものの遂行を醸成すること」の大切さを指摘している (Böhme 1995=2006 : 220)。また、雰囲気の「準客観性」は「人には雰囲気を変えたり産み出したりする能力がある」という事実をあらためて浮き彫りにする。私たち一人一人に対して、社会的雰囲気をよくするために何をすべきかという「人と人との間の関係に対する責任が問われている」のである (Böhme 1995=2006 : 221)。

現代感性学の試みとしては、W. ヴェルシュの仕事も見逃せない。ヴェルシュの美学=感性学は社会美学が現在おかれている社会的文脈を考えるために必要な考察を含んでいる (Welsch 1990=1998 ; 1997)。

ヴェルシュの指摘を待つまでもなく、現代は何

6) 日本でも感性学への意欲的な取組みがある (岩城 2001)。

7) 相互行為においては言葉の意味よりも音調や抑揚がとくに重要である。筆者は以前から言葉のもつ感性的・美的側面について考察してきたが、社会美学を意識するようになってから改めてその意義を再確認させられている (宮原 2005a ; 2008)。

もかもが「美化 aestheticization」されていく時代である (Featherstone 1991)。商品デザインやショッピング・モールというまでもなく、「ライフスタイル雑誌、エチケット教室、整形手術、ビューティ・サロン、フィットネス、瞑想教室、遺伝子工学」から「肉体や魂や心のスタイリング」まで、日常生活は「美化」で溢れ返っている (Welsch 1997: 6)。だが、「すべてを美しくすることは美 beauty のクオリティを破壊する。偏する美はその顕著な特質を失い、単なる小綺麗さ prettiness へと退化する」 (Welsch 1997: 83)。

ヴェルシュは過剰に美化された現実に対抗し、批判的な感性学を提唱する。それは「すでに過剰に装飾された環境にさらに多量の美を付加するのではなく、この超美学的な環境のただなかに美学的な空白地帯や砂漠を創り出す」ことを目指す (Welsch 1997: 83)。この感性の空き地には「奇妙なもの、ぶかっこうなもの、抵抗するもの、傷つけるもの、理解しがたいもの、分裂したもの、いらだたしいもの、無礼なもの」などの多種多様性が繁茂する (Welsch 1997: 119-121)。それは同時に、私たちが「電子メディアの外側にある経験」を再確認し、「一回限りの出来事という反復不可能な実在への憧れ」に目覚め、私たち自身の「身体の主権性と非妥協性を再発見する」場でもある (Welsch 1997: 88)。

ヴェルシュの感性学は倫理との一体化を指向するものであり、「美—倫理学 aesthet/hics」とも呼ばれている。「美学の表面はデザインの形をとるかもしれないが、その美—倫理学的核心は正義を目指している」 (Welsch 1997: 74)。社会美学の規範性、倫理性、ユートピア性は、こうした批判的な感性学と響き合うものである⁸⁾。

おわりに—社会美学の展開に向けて

本稿はまず、「社会美学 social aesthetics」をテーマとする近年の人文社会科学文献の検討を

行った。その結果、社会美学が社会の感性・美的質を把握しようとする、また、その対象が身のまわりの小社会に軸足をのこしつつも、より大きな社会へと広がる可能性をもつこと、さらに、事実の記述・分析にとどまらない規範的、倫理的、ユートピア的志向性をもつことを指摘した。

次に、本稿は20世紀の人文社会科学全体に視野を拡げ、上記の特徴づけをベースとして、社会美学のさらなる深化と豊穡化に向けた理論研究の道筋を示そうと試みた。石川三四郎、ジンメル、モリス、組織美学、雰囲気美学、感性学など、短いスケッチではあるが、社会美学を醸成する知的地盤の深さと豊かさの一端を示すことができたのではないかと考える。今後はこれらの知的貢献を詳細に検討し、その成果を統合しつつ、社会美学の理論的支柱を確かなものにしていく作業が残されている⁹⁾。

さらに、これまで言及できなかったが、カントの『判断力批判』をあらためて再検討することが有益である (Kant 1790=1994)。社会美学は従来の社会科学とは異なり、社会制度やイデオロギーではなく、社会の感性・美的質あるいは「フィール」を認識しようとする。だが、そもそも物事の「感性・美的質」あるいは「フィール」を認識するとはどのようなことなのか。また、この種の感性的・美的認識が科学のような「客観性」を主張しないのは当然としても、一定の学問的認識としての普遍性を主張することは可能であろうか。カントの『判断力批判』はこれらの根本問題に対して、感性的・美的認識における「無関心性」や「悟性と構想力の遊動」、美の「主観的普遍性」などの原理的考察を試みている。認識や判断の対象が「社会」へと拡張された場合、カントならどう考えるか、それを追究する必要がある。

同時に、『判断力批判』との対話から生み出された F. シラーや H. アーレントの社会思想も重要である (von Shiller 1847 [1795]=2003; Arendt

8) 美学と倫理の関連については、M. フーコーも重要である (Foucault 1984=1987)。フーコーの「生存の美学」は「深い社会性に貫かれ」ており、むしろ「社会関係の強化」をとまう (Castronovo 2007: 59)。これを社会美学の観点からあらためて考え直す必要がある (宮原 1992a; 1992b; 1997)。

9) 石川三四郎、ジンメル、モリス、組織美学、雰囲気美学、感性学に関しては、それぞれ別稿で踏み込んだ考察を行う予定である。

1958=1994)。シラーによる「仮象」「遊戯」「美的国家」に関する洞察、アーレントによる「活動」「意見」「公共性」に関する考察は社会美学の展開にとって示唆に富んでいる。制度論やイデオロギー論ではなく、道徳規範論でもなく、美学・感性学の立場から「よき社会」を構想する試みにとって、カント・シラー・アーレントの思想潮流は魅力的である（浅沼 2004；小田部 2006）。

なお、「社会美学 social aesthetics」という言葉は「パブリック・アートやエンタテインメント」「地域や民族に共有された美意識」「街並みや景観の美」「生き方の哲学」「社会を美化する活動」など、さまざまな連想をもたらす。それぞれ本稿にいう社会美学と関連する側面もあるが、いずれもその核心をとらえていないことに留意したい。とくに、「社会美学」に対して反射的に「政治の美学化」（W. ベンヤミン）の危険性や「美しい国」（安部晋三）の反動性を指摘する向きも予想されるが、それが短絡的杞憂にすぎないことは本稿を通じて明らかであろう。

もっとも、前世紀末までに「美をめぐる語彙は人文科学の世界から追放され、地下へ追いやられてしまった」のも事実である（Scarry 1999：52）。現在の人文社会科学において、「社会を美学すること、あるいは、社会との関連で「美」や「美学」を肯定的に提示するためにはそれなりの準備がいる。こうした知的状況に反省をくわえるとともに、「社会を美学することの肯定性についてより緻密な議論を提示していくこともまた必要となるだろう（Böhme 1995；Scarry 1999；Castronovo 2007；仲正編 2003）。たとえば、E. スカリーは「美」を力強く擁護しながら、その根元的な倫理性を巧みに論証している。しかも、「社会美学 social aesthetics」という表現こそ用いないものの、人と人の関係性に内在する「美」と「正義」の不可分性についてきわめて説得的な議論を展開している。社会美学の理論的展開にとって大きな意義をもつ仕事である（Scarry 1999）。

最後に、筆者は現在、「社会を味わう」ことを基本として、社会美学の構築に向けた研究を進めている。ここで「社会」とは「人と人の交わり」のことをいう。これまで私たちが「味わう」対象は、もっぱら料理や芸術作品、自然景観などに限られていた。社会美学は私たちが「味わう」対象を「人と人の交わり」である「社会」そのものに拡張するのである。

筆者の考えでは、社会美学が認識しようとする感性的・美的質とは「人と人の交わりの質」にはかならない。社会美学がその軸足を身のまわりの小社会の認識におくのは、そこでの「人と人の交わり」が私たち一人一人にとって「味わいやすい」からである。さらに、「味わう」という活動はその対象が「どのような味なのか」識別するとともに、それが「よい味かどうか」価値判断する側面を含んでいる。「社会を味わう」というとき、私たちはたんなる事実認識にとどまることはできない。その「社会」が美味しいか不味いか、必ず判断してしまう。このとき、それがなぜ美味しいのか（不味いのか）を考えることが大切である。

私たちは必然的により「美味しい社会」を求めていく。言いかえれば、社会美学は「社会美」を指向する。これが社会美学のもつ規範性、倫理性、ユートピア性の本質である。

本稿の目的は社会美学 Social Aesthetics の意義と特徴を明らかにし、その理論的考察の展開可能性を示すことにあった。しかし、他方では、身のまわりの社会を「味わう」実践を通じて社会美学の意義と特徴を具体的に示していくことも重要である。社会美学は狭い意味の学問から溢れ出て、私たちの生活実践に取り込まれていく必然性をもっている。筆者はここ数年、授業や会議の風景、被災地の復興状況、商店街の賑わい、美術館の雰囲気などをめぐって、さまざまな「体感社会調査」を試みてきた。その成果については稿をあらためて報告することとしたい¹⁰⁾。

10) ここ数年、筆者は美術家の藤阪新吾とともに社会美学の理論的・体感的研究に取り組んでいる（藤阪 2008）。また、関西学院大学社会学部の宮原ゼミナールでは社会美学を研究テーマとし、「体感社会調査」を取り入れている。

参考文献

- 浅沼圭司 2004 『ゼロからの美学』 勁草書房
- Arendt, Hannah 1958 *The Human Condition*, University of Chicago Press (=1994 志水速雄訳 『人間の条件』 ちくま学芸文庫)
- Barrett, Frank J. 2000 'Cultivating an Aesthetic of Unfolding: Jazz Improvisation as a Self-Organizing System', S. Linstead & H. Hopfl (eds.), *The Aesthetics of Organization*, Sage
- Berleant, Arnold 1999 'On Getting Along Beautifully: Ideas for a Social Aesthetics', P. Bonsdorff & A. Haapala (eds.), *Aesthetics in the Human Environment*, International Institute of Applied Aesthetics (Finland)
- Berleant, Arnold 2005a 'Ideas for a Social Aesthetic', A. Light and J. M. Smith (eds.) *The Aesthetics of Everyday Life*, Columbia University Press
- Berleant, Arnold 2005b *Aesthetics and Environment*, Ashgate [Chapter 14 'Getting Along Beautifully: Ideas for a Social Aesthetics']
- Böhme, Gernot 1995 *Atmosphäre. Essays zur neuen Ästhetik*, Suhrkamp Verlag (=2006 梶谷真司・斉藤渉・野村文宏編訳『雰囲気美学』 晃洋書房)
- Böhme, Gernot 2001 *Ästhetik: Vorlesungen über Ästhetik als allgemeine Wahrnehmungslehre*, Wilhelm Fink Verlag (=2005 井村彰・小川真人・阿部美由紀・益田勇一訳『感覚学としての美学』 勁草書房)
- Castronovo, Russ 2007 *Beautiful Democracy—Aesthetics and Anarchy in a Global Era*, University of Chicago Press
- de Certeau, Michel, Luce Giard and Pierre Mayol 1994 *L'invention du quotidien, II, habiter, cuisiner*, Gallimard (=1998 trans. Timothy J. Tomasik, *The Practice of Everyday Life, Volume 2: Living and Cooking*, The University of Minnesota Press)
- Christlieb, Fernandez P. 2001 'Political Psychology as Social Aesthetics', *Political Psychology* 22(2): 357–366
- Coleman, Roger 1988 *Art of Work*, Pluto Press (=1998 里深文彦・柳坪葉子訳『仕事という芸術—モリスの夢、ダイダロスの復讐』 アグネ承風社)
- Dewey, John 2005 [1934] *Art as Experience*, Penguin Books
- Featherstone, Mike 1991 *Consumer Culture and Postmodernism*, Sage (=1999 川崎賢一・小川葉子・池田緑訳『消費文化とポストモダニズム』 恒星社厚生閣)
- Federici, Raffaele 2005 'A Kandinsky Perspective, Dissertation on the Social Aesthetics of Georg Simmel', *International Review of Sociology* 15(2): 277–289
- Foucault, Michel 1984 *Histoire de la sexualité L'usage des plaisirs*, Gallimard (=1987 田村淑訳『性の歴史Ⅱ 快楽の活用』 新潮社)
- 藤阪新吾 2008 「鮎屋を味わう—関係性の感性的な認識について」 (未発表論文)
- Gagliardi, Pierre 1996 'Exploring the Aesthetic Side of Organizational Life', S. R. Clegg, C. Hardy & W. R. Nord (eds.), *Handbook of Organization Studies*, Sage
- 五島茂 1971 「ラスキンとモリス」 五島茂責任編集『世界の名著—41 ラスキン モリス』 中央公論社
- Highmore, Ben 2004 'Homework: Routine, social aesthetics and the ambiguity of everyday life', *Cultural Studies* 18(2/3): 306–327
- 石川三四郎 1946 [1932] 『社会美学としての無政府主義』 組合書店
- 石川三四郎 1978a 『石川三四郎著作集 第三巻』 青土社
- 石川三四郎 1978b 『石川三四郎著作集 第四巻』 青土社
- 石川三四郎 1978c 『石川三四郎著作集 第五巻』 青土社
- 居安正 2004 「ジンメルにおける「社会学の領域」の成立」 『社会学の根本問題』 世界思想社
- 岩城見一 2001 『感性論 エステティックス』 昭和堂
- Kant, Immanuel 1790 *Kritik der Urteilskraft* (=1994 宇都宮芳明訳『判断力批判』 以文社)
- 九鬼周造 1979 [1930] 『「いき」の構造』 岩波文庫
- Kosnoski, Jason 2005 'John Dewey's Social Aesthetics', *Polity* 37(2): 193–215
- Larsen, Lars Bang 1999 'Social Aesthetics: 11 examples to begin with, in the light of parallel history', *Afterall* 1: 1–5
- Lefebvre, Henri 1992 *Éléments de rythmanalyse*, Syllepse (=2004 trans. Stuart Elden & Gerald Moore, *Rhythmanalysis*, Continuum)
- MacDougall, David 1999 'Social Aesthetics and The Doon School', *Visual Anthropology Review* 15(1): 3–20
- MacDougall, David 2006 *The Corporeal Image-Film, Ethnography, and the Senses*, Princeton University Press [Chapter 4 'Social Aesthetics and the Doon School']
- 宮原浩二郎 1992a 『貴人論』 新曜社
- 宮原浩二郎 1992b 「身体の変容と倫理」 『思想』 817: 91–95
- 宮原浩二郎 1997 「フーコーのいう権力」 講座現代社会学『現代社会学の理論と方法』 岩波書店
- 宮原浩二郎 2005a 『論力の時代 言葉の魅力の社会学』 勁草書房
- 宮原浩二郎 2005b 「成熟社会の復興理念 社会美学の視点から」 関学 COE 災害復興制度研究会編『災害復興阪神・淡路大震災から10年』 関西学院大学出版会

- 宮原浩二郎 2005c 「社会はアート 共同制作を」
『朝日新聞』2005年10月7日（夕刊）
- 宮原浩二郎 2005d 「ジンメル 社交」「九鬼周造 いきな
関係」大村英昭・宮原浩二郎・名部圭一編『社会
文化理論ガイドブック』ナカニシヤ出版
- 宮原浩二郎 2006 「復興とは何か」『先端社会研究』6：
5-40
- 宮原浩二郎 2008 「自分の言葉で語ること-言葉の感性
的次元をめぐる」『社会言語科学』10(2)：1-12
- de Monthoux, Pierre Guillet 2000 'The Art Management
of Aesthetic Organizing', S. Linstead & H. Hopfl
(eds.), *The Aesthetics of Organization*, Sage
- de Monthoux, Pierre Guillet & Antonio Strati 2002
'Modernity/art and Marketing/aesthetics—A Note on
the Social Aesthetics of Georg Simmel',
Consumption, Markets and Culture 15(1): 1-11
- 仲正昌樹編 2003 『美のポリティクス』御茶の水書房
- 小田部胤久 2006 『芸術の条件 近代美学の境界』
東京大学出版会
- Saldivar, Ramon 2007 'Social Aesthetics and the
Transnational Imagery', J. Flores & R. Rosaldo
(eds.), *A Companion to Latina/o Studies*, Blackwell
- Samier, Eugene 1997 'Administrative Ritual and
Ceremony: Social Aesthetics, Myth and Language
Use in Rituals of Everyday Organizational Life',
Educational Management & Administration 25(4):
417-436
- Scarry, Elaine 1999 *On Beauty and Being Just*, Princeton
University Press
- von Shiller, Friedrich 1847 [1795] *Über die ästhetische
Erziehung des Menschen. In einer Reihe von Briefen*
(=2003 小栗孝則訳『人間の美的教育について』
法政大学出版局)
- Simmel, Georg 1909 *Die Koketterie* (=2004a 居安正訳
『社会学の根本問題』世界思想社)
- Simmel, Georg 1917 *Grundfragen der Soziologie* (=2004
b 居安正訳『社会学の根本問題』世界思想社)
- Simmel, Georg 1957 [1896-1918] *Brücke und Tür, Essays
des Philosophen zur Geschichte, Kunst und
Gesellschaft* (=2004c 酒田健一・熊沢義宣・杉野
正・居安正訳『ジンメル著作集12 橋と扉』
白水社)
- Stachelhaus, Hainer 1987 *Joseph Beuys*, Classen Verlag
(=1994 山本和弘訳『評伝ヨーゼフ・ボイス』
美術出版社)
- Strati, Antonio 2000 'The Aesthetic Approach in
Organization Studies', S. Linstead & H. Hopfl, *The
Aesthetics of Organization*, Sage
- 竹中克久 2007 「組織秩序の形成と解体を説明するオル
タナティブ—組織目的、組織文化そして組織美学」
『組織科学』41(2)：95-105
- Tilman, Rick 2004 *Thorstein Veblen, John Dewey, C.
Wright Mills and the Generic Ends of Life*, Rowman
& Littlefield [Chapter 6 'The Social Aesthetics of
Veblen, Dewey and Mills Compared']
- 鶴見俊輔 1976 「解説」『近代日本思想体系 16
石川三四郎集』筑摩書房
- Vincent, Andrew 2006 'Bosanquet and Social
Aesthetics', *Collingwood and British Idealism Studies*
12(1): 39-65
- Welsch, Wolfgang 1990 *Ästhetisches Denken*, Philipp
Reclam (=1998 小林信之訳『感性の思考』
勁草書房)
- Welsch, Wolfgang 1997 *Undoing Aesthetics*, Sage
- Willis, Paul 2001 *The Ethnographic Imagination*, Polity

The Conception of Social Aesthetics—A Theoretical Exploration

ABSTRACT

In this paper, I explore the aesthetic approach to the study of social phenomena. I begin with an examination of recent articles on ‘social aesthetics’ which appeared in a number of social and human science journals around the world. The examination shows that Social Aesthetics attempts to grasp society’s aesthetic qualities, and does so by initially describing situations of face-to-face social interactions. Social Aesthetics then moves on to examine larger societies, and entails certain normative, ethical or utopian orientations.

With these characteristics in mind, I turn to the intellectual forerunners of Social Aesthetics such as G. Simmel, W. Morris and S. Ishikawa, and its postmodern companions such as ‘Oragnization Aesthetics’ (A. Strati), ‘Aesthetics of Atmosphere’ (G. Böhme) and ‘Aisthetik’ (W. Welsch). Through this theoretical analysis, I try to show the depth and width of the intellectual background of Social Aesthetics, and point to the theoretical directions for its development..

Key Words: social aesthetics, society’s aesthetic qualities, social interaction